
骸ト刹羅イテ開デン結

江室 美佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結ンデ開イテ羅刹ト骸

【Nコード】

N3886T

【作者名】

江室 美佳

【あらすじ】

私が今からお話するのは、古くから伝わるくだらない昔話です。けれども、それは不思議な不思議なお話なのです。

騙すも騙されるも、それが人の姿。
隠し隠され、泣きつき泣きつかれ。

愛も何も、そこには初めから何もない。

人間というのは、卑怯な生き物ですね。

（前書き）

*ニコニコ動画で人気のボーカロイド楽曲を小説にしてみました。
*私的解釈によるものですので、曲のイメージを壊されたくないというかとは直ちに退避してください！

結ンデ開イテ羅刹ト骸

作詞：八チ

（さあさあ今宵も無礼講
獄卒衆すら巻き込んで
宴の瀬に成り下がるは
純真無垢故質の悪い
悪逆非道に御座います）

片足無くした猫が笑う
「ソコ行ク御嬢サン遊ビマシヨ」
首輪に繋がる赤い紐は
片足の代わりになっちゃいない

や や や や 嫌嫌嫌

列なす卒塔婆の群れが歌う
「ソコ行ク御嬢サン踊リマシヨ」
足元密かに咲いた花は
しかめっ面しては愚痴ってる

腹を見せた鯉幟
孕んだのは髑髏

やい やい
遊びに行こうか
やい やい
笑えや笑え

らい らい
むすんでひらいて
らい らい
羅刹と骸

一つ二つ三つで
また開いて
五つ六つ七つで
その手を上に

松の木には首輪で
宙ぶらりんりん
皆皆皆で
結びましょ

（下らぬ余興は手を叩き、
座敷の囲炉裏に焼べ曝せ）

下賤なうわばみ墓前で逝く
集り出す親族争いそい
「生前彼ト約束シタゾ」
嘯くも死人に口は無し

や や や や 嫌嫌嫌

かつて嬉しい花いちもんめ
次々と売られる可愛子ちゃん
最後に残るは下品な付子
誰にも知られずに泣いている

やい やい

悪戯しようか

やい やい

踊れや踊れ

らい らい

結んで開いて

らい らい

羅刹と骸

三つ二つ一つで

息を殺して

七つ八つ十で

また 結んで

高殿さえも耐え兼ね

火傷を背負い

猫は開けた襖を

閉めていく

結局皆様他人事

他人の不幸は
知らんぷり！

やい やい
世迷えや世迷え

らい らい
イロハに惚れ惚れ
らい らい
羅刹と骸

一つ二つ三つで
また開いて
五つ六つ七つで
その手を上に

鳥が泣いてしまわぬ
内にはらへら
一つ二つ三つで
また明日

（悪鬼羅刹の如く その喉猛らせ、
暴れるうわばみの生き血を啜る。
全ては移ろうので御座います。
今こうしている間にも、様々なものが。

はて、何の話をしていたかな？
まあ、そんな与太話は終わりにしましょう。

さあ、お手を拝借。)

一つ二つ三つでまた明日

——さあさあ今宵も無礼講。

獄卒衆すら巻き込んで、宴の瀬に成り下がるは純真無垢故質の悪い悪逆非道に御座います。

いえ、これは私の故郷に昔から伝わっている、言わば何処にでもある昔話ですよ。私も祖父から聞いたのですが、その祖父もまた父から聞いたと言っていました。そうして昔から伝わってきた、古い古いお話なんです。

祖父はお酒の席で気分が良くなると、必ずこの話をしてくれましたよ。そして話し始める前には毎回この口上からしていたもので私もここから話さないとうにも気分が乗らなくてね。

——ああ、そうでした。私の昔話などしても仕方がありませんね。では、お話しさせて頂きましょう。不思議な不思議なお話を、ね。

——昔、ある金持ちの男がいました。彼の名前は、そうですね……田中、とでもしておきましょうか。何、単なる昔話ですから名前など関係ありますまい。何でもいいのですよ。

彼は贅沢を絵に描いたような男で、金を惜しむことなく使うことを好んでいました。

次に好きだったのが、女です。

美しい女を見つけては買い、そして遊廓に高値で売り飛ばして恩をも売る。自分はいくつとその女がいる遊廓で豪遊する。そんなことをするような、言ってしまうえば物好きな男でした。そんな彼の周りの者達は敬遠すると共に、その底知れない経済力の恩恵にあやかろうと必死でした。彼の里に住むものは誰も彼に逆らおうとはせず、陰に隠れてひそひそと噂するだけ。勿論、そんな金の亡者である田

中を良く思わない者はそれはそれはたくさんおりました。しかしそんな彼等もまた、田中に逆らうことは出来ず、静かに日々を送るしかありませんでした。

そんな田中には、お気に入りの女がいました。彼女はマリコと呼びましょう。……え？ それはうちの女房の名前だからよしてくれって？ ははは、それを知ってマリコとすることにしたのですよ。宴の席で話されるものですから、昔からそうやって楽しんでいたのです。ほんの少しご辛抱を。

マリコと田中の出会いは伝わってはならず、謎のままなのですが、彼女は本当に美しい女だったそうです。——どうです、自分の女房の名が世を傾けるほどの美貌の持ち主として語られるのは、悪くないものでしょう？

マリコはそう、誰もが振り向くほどに美しい女だったのです。男ならば一度は抱いてみたいものだと言われるような。そんなマリコを、田中は当然ながら常々自分のものにしたいと思っておったようです。自分以外の者が絶世の美女と言われていた彼女を手に入れるなど、笑止千万、考えたくもなかったことでしょうね。

果たして田中はどんな手を使ったのか、思惑通りにマリコを手中に収めることに成功しました。

マリコが遊郭に入ってからというもの、田中は毎日毎日、彼女に会いに行きました。そして、マリコには決して他の客を取らせることはありませんでした。ただ、客寄せのための道具として彼女を遊郭に置いていました。不思議と、彼女がいるというだけで獣じみた男達は執拗に遊郭に足を運びました。足繁く通っていれば、いつかマリコを抱くことが出来るのではないかと愚かにも信じてね。

マリコが遊郭に入ってしまったら、さすがの田中も焦り出しました。今は誰もマリコに近付くことは無いが、いつか何かの拍子に彼女の目に他の男が映りこみ、彼女を取られてしまうのではないかと。今まで遊女を嫁に貰うことなど微塵も考えていなかった田中ですが、今度ばかりは違いました。

こんなに美しい女が自分の前に現れることは、もう二度とないだろう。いや、マリコ以上に美しい女がこの世に存在するはずがない。彼女を誰にも渡すわけにはいかない。遊郭に置いておくのはもう止めにして、いつそ自分だけのものにしてしまおうか。金のことなど、もう気にしてなどおれぬ。

……と、今まで何より大切にしていた金のことさえ、マリコを前にした田中の前では塵に等しい事柄に成り代わってしまっていたのです。それほどまでに、田中はマリコに夢中でした。何度も申し上げますが、マリコは絶世の美女。この世のものとは思えぬほど、ね。立てば芍薬、などという言葉さえ、彼女に対しては失礼なものに感じられるまでに。

田中がマリコを抱いたのはたった、たった一度きりでした。勿論、彼は幾度となく彼女を抱こうとしました。けれど、彼女の神々しいまでの美しさを前にすると、己の醜い欲望を彼女にぶつけることがどうしてももなく愚かに感じられたのです。けれどその反面、その美しさを自らの汚らわしい欲望でめちやくちやに汚してしまいたい抱きたい。抱きたい。彼女を我が物に。もう一度、あの快楽を味わいたい。

皆様も一度くらい、そんな思いに駆られたことはございましょう？ 破壊の衝動と、守護の使命に苛まれる、そんな経験がございましょう。田中は日々、そんな二律背反の思いに掻き立てられ、精神を崩壊させてしまう寸前でした。

そして、一方のマリコも崩壊寸前でした。彼女の場合、精神ではなく肉体の方が限界を迎えようとしていたのです。これもまた、田中を焦らせ追いたてる要因でした。

彼女の妖艶で蠱惑的な豊満な肉体は、遊廓に入ってから痩せ細っていく一方でした。

食事は十分に取っているはずなのに、何故か彼女は日に日に痩せていく。心配になった田中は、彼女を医者に見せようと思いました。しかし彼女は、彼の申し出を頑ななまでに断り続けました。

「そのような必要はございません。私は至って健康でございます。お医者様の手を煩わせるまでもございません」

彼女はそうは言うものの、当然ながらやはり田中はマリコの身を心配しました。

田中の心配をよそに、日に日にマリコは衰えていきました。そしてついにはほとんど歩けなくなってしまうほどに。誰とも言葉を交わさず、布団に横たわりただ天井だけを見つめる毎日。周りの者は皆彼女を不気味がり、近付こうとしない。彼女はそんな状況で生きていました。彼女はゆっくりと痩せ細り、皮と骨だけと言えるような相貌になってしまっても生き続けました。

——— ということか全く分からない？ ええ、そうでしょうね。しかしこれは古い昔話。常識を語ったところで意味のないことなのです。一種の御伽噺ですから。桃太郎のお話と同じですよ。桃から赤子が生まれてくるなど、ありえないでしょう？ それと似たようなものです。小さいことを余り気にしていると、お話を楽しめなくなってしまうですよ。これから面白くなってくる場所ですから、しばしご静聴願います。

そうして幾つかの歳月が過ぎました。

痩せ細り、マリコのあの美しさは霞んでしまっておりました。かつての噂など、まるで嘘のようでした。そんなマリコに近付こうとするものは田中ぐらいのもので、マリコが衰えると共に遊廓も当然ながら廃れていきました。あそこにはこの世のものとは思えぬほどの美しい女がいるという噂は、あそこにはこの世のものとは思えぬ化け物のような女がいる、という噂に形を変えていきました。それでも田中だけはマリコを想い続けました。もう誰も、田中にかつてのような威厳を感じてはおらず、女に溺れたただの愚かな男とされていました。事実、そうでしたかね。

…… ある夜のことです。マリコが突然、田中を呼び出して彼にこう言いました。

「今まで、本当にお世話になりました。私はもう長くはないでしょう。すでに長く生き過ぎているのです。いつこの世から消えてもおかしくはありません。もう、この世に思い残すことはない、そう言いたいのですが……」

マリコは目に涙を溜めて言いよどみました。そこですかさず、田中が言います。

「何だ、私に出来ることなら何でもしよう。もう、かつての金も権力もない。それでも何か、私に出来るようなことが残されているのなら……。だから頼む、生きていてくれ。この世から去るなどと悲しいことを言わないでくれ。お前のいない世など、私にとって生きる価値などないものだ」

田中がそう言うと、マリコは静かに目を伏せ立ち上がりました。

「あなたのお見せしたいものがございます」彼女はそう言って、じつと田中を見つめました。その目は地獄の閻魔をも魅了してしまうのではないかと思う程に深く、妖しいものだったそうです。

マリコは部屋にあった押入れの戸をすっ、と音もなく引きました。その中に在ったものを見て、田中は言葉を失い、呼吸を忘れてしまうほどに驚きました。

何と、押入れの中には九つ、十ほどであろう少女が横たわっていたのです。黒い髪は尻の辺りまで長く伸びていましたが、きちんと手入れされておったのでしょう、絹のように滑らかに流れていました。眠っているものの、少女の美しさに田中は目を見張りました。

整った目鼻。蠟燭の明かりに照らし出された、上等な陶器のように白く清らかな頬には、長い睫毛の影が落ちており、その寝顔はまさに天上からの使いのようであったそうです。

「この子は、一体……。何と、美しい」

「これは私の子です」

再び、田中は言葉を失いました。どういふことか、彼には全く分かりませんでした。

「私がこの遊廓に来た時から、この子はここにいたのです。だから、

貴方とここで夜を過ごすわけにはいきませんでした。この子に、母親の汚らしいところはみせたくありませんでしたから。それに、昼間人のうろついている頃合いに外に出すわけにはいかなかったの
で、彼女には昼夜を逆転させて過ごさせておりました。昼間は押入れの闇の中に。彼女にとつて夜は、押入れの中の闇。昼は、この蠟燭の光です。私は夜だけ、彼女を押入れから解放し、遊ばせておつたのです」

それを聞いて、田中は思い出しました。階下における遊女がいつだつたかぼやいていたことを。

夜更けに、子供が遊び回っているかのような喧しい足音が聞こえ、仕事にならないじゃないかと何人かのかむろを叱りつけたのだが、誰もそんなことはしていない、遊んでいないと言い張るので腹が立ち、折檻してやったと言つていた話を。

その足音の正体は、この少女だったのではないか。田中は瞬時にそう思いました。

そして、もう一つ田中の頭に浮かんだことがありました。

「まさか、お前がそんなにも痩せてしまったのは……」

「ええ、そうでございます。全てはこの子のため。食事は全て、この子にあげていました」

そう言つて、マリコは静かに押入れの戸を閉めました。

「旦那様、私の願いは他でもありません。どうか、私がこの世を去つた後、この子を守つてあげて下さい。どうか、お願い申し上げます。こうして今までお世話になつておつた身で、図々しい願いであることは重々承知しております。しかし、この子は私の希望でございます。唯一無二の宝でございます。私のことを宝のように大切に
して下さいいた旦那様にしてみれば、私の宝は貴方様の宝も同然でございます。ですから、どうか、どうか……」

そう言つと、マリコはおいおいと泣き崩れました。田中は彼女に駆け寄りました。

「ああ、勿論だ。この子がお前の宝であるのなら、私の宝も同然。」

必ず、この子を守ってやろう」

「ああ、旦那様。本当にありがとうございます」

……田中とマリコが結ばれたのは、その夜が最後でした。マリコはその夜を最後に、姿を消してしまったのです。宝だと言った、可憐な少女を遊廓に残したまま。

田中はマリコがいなくなったことに大層悲しみました。誰とも口を利かなくなるほどにね。彼が口を利くのは、マリコの子である少女のみ。彼女の名は……ユリとしましょう。

——はは、悪ふざけとはお人が悪い。貴方様の娘と同じ名であるのはただの偶然かもしれぬというのに。いいではありませんか。彼女もまた、とんでもない美少女なのですから。

ユリは感情の乏しい子でした。無理ありません。話ができるのはマリコだけ、しかも大きな声で話すことは許されなかったために、言葉さえその年頃の子にしては拙いものでした。

しかし彼女の愛らしさは、まさに母親譲りでした。田中は絶望の淵にありながらも、彼女のその美しさのおかげで何とかこの世に留まることが出来ました。ユリに、マリコの姿を重ねていたのです。う。

……しかし、それがまずかった。

精神的に追い詰められてしまった田中は、あろうことかユリを性の対象にしてしまったのです。母親の姿をユリに重ね、ユリを抱くことでマリコを抱いているのだと田中は信じて疑いませんでした。

手に入れることが叶わなかったマリコ。しかし、ユリならば。幼い彼女は抵抗することも知りません。田中の思うがままに出来たのです。あの清らかで神々しいマリコと似通ってはいるものの、幾らかユリの方が手の届きやすい場所にいると、田中は思ったのです。う。……何ともおぞましい話ですがね。

マリコが去って、一年程過ぎた頃です。田中はとうとう死んでしまいました。ええ、自殺ですよ。遊廓の庭にある大きな松の木に首

をくくつて、田中は死んでいました。

発見した者の話では、その松の木の下でユリが遊んでいたそうです。あるうことが、田中の死体をぶらぶらとぶらんこのように揺すって遊んでいたそうです。田中の穴という穴から出てきた汚物を被りながら、ね。それはそれは楽しそうに遊んでいたそうですよ。愛らしい、満面の笑みを浮かべて。

周りの者は口々に噂しました。あの遊廓にいた恐ろしい化け物のような女が、田中を呪い殺したのだと。そして、ユリはあのマリコの子に違いない、あの子は夜叉の子だ、と。

しかし不思議なことに、ユリは忌み嫌われることはありませんでした。とは言つても、汚らしい男に、ですがね。

彼女の笑顔は、本当に純真無垢というべき可憐なものでした。それを見たものは彼女に魅了され、夢中になって彼女を抱こうとした。それ故、田中がいなくなつた後、ユリの噂を聞きつけた田中のように物好きなたくさんの方々が彼女を手に入れようとして群がりました。

「生前彼と約束したのだ。自分にもしものことがあつた時には、彼女を頼むと私は頼まれたのだ」と言うものすらあつたそうです。死人に口無し。真偽のほどは誰にも分かりません。男達はそうまでしても、何とかユリを手に入れようとしてました。ユリと並べば、どんな美しい娘も霞んでしまふ。たちまちブスに成り下がるというものですからね。

ユリのおかげというべきでしょうか、皮肉にも遊廓はかつての勢いを取り戻しました。勿論、ユリは売れっ子です。遊廓で売れ残つた女達を見て、ユリはいつも静かに笑つたそうです。仕事のない女達はどうすることも出来ない悔しさの余り、夜な夜な密かに泣いたとか。

ユリにはある奇妙とも言える癖があつたそうです。

気に入つた男を見つけると、すつと手を差し出して手招きをする。

……こんな風にね。そして、男が寄つてくると耳元でこつ囁く。

「悪戯しましょう」と。

美しい娘にそんな意味深なことを言われればどうです。男たるものの、引き下がるわけにはいきまずまい。怪しげな女ほど、どうしてもか男は惹かれてしまうものですから。世にはびこる噂など、己の欲望の前では何の障害にもならないのです。

そして、ユリは男を部屋に招き入れると、布団の上でまた手招く。そして囁く。「子作りしないか？」と。美しい女にそんな淫靡なことを言われた男はがどうなるか、男性である皆様ならお分かりになられますでしょう。そう、男なら誰でも一たまりもありません。

そんな嘘のような噂が瞬く間に世に広まり、遊廓に花が咲き戻って間もなくのことです。

……また、遊廓で人が死にました。

一人の男が自ら命を絶ったのです。

それだけのことならば、まだ見過ごすことも出来るというものですが、そういうわけにはいきませんでした。何故なら、その死に様子が同じだったのですから。そう、あの男、田中の死に様とね。

遊廓の庭の松の木。そこにぶら下がる男の死体。そしてその下にはやはり、ユリの姿がありました。何も変わらない構図の中で、ユリの姿だけは田中が命を絶ったその当時よりも、女として美しく変化していました。

しかし、このことは世間には知られませんでした。せつかく取り戻した遊廓の活気を失うわけにはいかないと、遊廓の者達が秘密裏に処理したのです。このことを知っていたのは遊廓の主人と、一人の世話人、そしてユリの三人だけでした。遊廓にいた遊女ですら、このことは知らなかったそうです。

死んだ男は、ユリの客でした。というよりも、ユリが遊廓で働き始めて最初に気に入った男でした。どういうわけがあったのかは分かりません。とにかく、その男は突然命を絶ったのです。

遊廓の主人は、ユリを問い詰めました。一体、あの男に何をした

のだ、と。主人はユリを遊廓の稼ぎ頭としながらも、不気味に思っていたのです。しかし、ユリは答えません。答えるはずがありません。「私は何も知らない」の一点張りです。

そのまま何もいまま終わればよかったのですが、その願いが神に届くことはありませんでした。

一人、また一人と、ユリの客が死んでいったのです。厄介なことに、他殺ではありません。全て例によって自殺でした。例によって、皆が皆、田中と同じような死に方で。

自殺者の数が片手では足りなくなった頃、いよいよ気味が悪くなった遊廓の主人は再びユリを問い詰めました。今度はこう問いました。

「一体、お前は何者だ。本当に人間か？」
するとユリは、ゆっくりと顔を上げ例の清らかな笑顔で笑いました。

「人間か、とそう問われれば、何と答えたものかしら」
くすくすと小さく笑い声をあげるだけで、ユリは何も言いません。主人は全身が栗立つのを感じました。居ても立ってもおられず、気が狂ったように主人は喚き立てました。

「お前は夜叉だ！ 夜叉の子だ！ そうでなければ羅刹だ！ 全てを壊す羅刹に違いない！」

すると、ぴたりとユリの笑いが消えました。主人は全身をわなわなと震わせました。

「羅刹……。それは何と私に似合いの言葉でしょうね。では、あなた達もまた羅刹かしらね」

「どういうことだ？」主人はユリの言葉の意味がとんと分からず、彼女に問いました。

「羅刹の女は美しいそうだけど……男は醜いそうよ。貴方達は、本当に醜い。醜いものなんて見たくないもの。醜いものは嫌い」

ふと見ると、ユリはそう言いながらも笑っていました。いかにも子供らしい、無邪気な笑顔で。あの、可憐な白い花のような美し

い笑顔で。蠟燭に照らし出されたその笑顔は、何と不気味だったことでしょう。

そこで主人はあるものを見ました。蠟燭の淡い光に浮かび上がった、ユリの影を。

それは、人間のそれとは似ても似つかないものでした。それを見た主人は飛び上がり、腰を抜かして倒れこみました。何も言うことが出来ず、陸に上げられた鯉のようにただ苦しげに口をパクパクと動かし、荒い息遣いで呼吸を繰り返しているだけでした。

そんな主人の様子を見て、ユリはととても楽しそうに手を叩いて笑っています。

「アハハハッ！ 面白い！」

喧しいまでに笑い声をあげるユリの背後では、ゆらゆらと影が揺れています。いえ、蠟燭が揺れているわけではありません。影そのものが揺れているのです。人間にあるはずのない、尻尾の影が。

「お、お前、それは一体何だ！」

ぶるぶると震える指先で、主人は何とか彼女の背後にそびえる影を指差しました。ユリは何のことやら分からないといった様子で、後ろを振り返りました。そして、それを見るやあつと声をあげました。

彼女の背後では、根元と先はしゅつと細く、中がずんぐりと膨らんだ立派な狐のそれと思われる尻尾が揺れていたのです。

「やだ、いけない。楽しかったものだから、つい気が緩んで……」

主人が耐えかねて叫び声をあげました。

「もう、静かにして欲しかったのに。こんなじゃもうここにはいられないなあ。折角お母様が見つけてくださった、いい巣だったのに」

「出て行け、出て行けええ！」

「煩いよ」

彼女は襖を閉めて、そのまま遊廓から出て行きました。

遊廓の者達が主人の叫び声を聞いて駆けつけたとき、彼が残され

ているはずのユリの部屋には、誰もいなくなっていました。もっとも、それは生きている人間は、という意味ですがね。

ユリが去って、このお話は終わり……とはならないですよ。もう一つ、挿話がありましてね。もう少しだけ、お付き合い下さいな昔、まだ田中が幼い頃のことです。

彼にはこれまた一風変わった特殊な趣味があったそうです。動物を虐める、という趣味がね。

身体を切り刻んだり、池に溺れさせたり、目を潰したり、身体を燃やしたり。それはそれは残虐な遊びを人知れず繰り返していたそうです。

彼の趣味の標的になったのは、もっぱら猫でした。

当時から野良猫というのは何処にでもいましたからね。田中は、そんな野良猫を捕まえては一緒に遊んでいたそうです。

そうやって殺されてしまった猫達にはしかし、人を騙すような知恵や技はありません。そこで、彼等は狐に頼んだのです。狐なら、持ち前の狡猾さと共に、人間に化ける術も持っていますからね。彼と遊んでやってくれ、と。

最初に猫にそう頼まれたのは、マリコの方だったのでしょうか。けれど、あるうことか彼女は田中に好意を抱いてしまった。それゆえ、猫達の恨みがは晴らされなかった。そこに現れたのが、ユリでした。

ユリは勿論狐の子でしたが、狐と言えども人と同じ。相手があらねば子は出来ません。では、その相手は狐でしょうか？ いいえ、そうではありません。

——ええ、そうです。そのまさかなのですよ。ユリの父親というべき存在は、田中だったのです。

——話が合わないですって？ そんなことはありませんよ。狐は人間より寿命が短いでしょう？ その分、成長が早いのです。マリ

コと田中が出会い、子を宿してその子が産まれ、一年もすればそれなりに立派にはなりますよ。

ユリは猫達の怨念の声を聞きながら成長したのです。それというのも、彼女が揺り籠としていた例の押入れの中の壁には、猫のような形をした染みがくつきりと残っていたそうですから。その猫には、片足がなかったとか。田中との因縁を感じずにはいられないでしょう。

田中によって生み出された怨念が、マリコやユリをずっと見張っていたのです。

言ってしまうえば、マリは自分の父親を殺したのですよ。しかし、その父親に犯されたのです。因果応報、というものでしょうかね。

狐は、猫にそそのかされたのですよ。狐は決して幸せにはなれませんでした。ユリに至っては、幸か不幸かの判断さえつかなかったでしょう。猫の声のせいだね。けれど、その猫さえ、もとはと言えば田中という人間に全てを奪われてしまったのです。全く、この中で一番不幸になるべきは誰なのでしょうね。

まあ、あなた方人間という生き物にとってみれば今の話など、結局皆様他人事、他人の不幸は知らんぷり、といったところでしょうがね。

——おやおや、私としたことが。余りに楽しかったものですから、ついつい出てしまいました。こうなってしまうえば、本性を隠すこともありますまい。皆様には、もう少し黙っていていただくことにしましょう。もう少し、と言っても来世まで、ですけどね。あなた方は生まれ変わった時、どんな姿になっているのでしょうか。猫か、狐か、または醜い人間か。

——悪鬼羅刹の如くその喉猛らせ、暴れる蟒？の生き血を啜る。
全ては移ろうので御座います。
今こうしている間にも、様々なものが。
はて、何の話をしていたかな？
まあ、そんな与太話は終わりにしましょう。
さあ、お手を拝借。

了

（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
もしよろしければ感想・評価等お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886t/>

結ンデ開イテ羅刹ト骸

2011年5月19日19時25分発行